

翟 勇 (Zhai Yong) (言語学)

Developmental Shift of Parsing Strategies: Processing Empty Subject Sentences among L1 and L2 Learners (言語発達における文処理方略の移行: 第1言語習得者と第2言語習得者の空主語文処理に着目して)

論文審査の結果の要旨

上記の論文は、第一言語習得者（子供）と第二言語習得者（外国語学習者）の空主語文処理に着目し、文処理方略は言語の習得が進むにつれ、「知覚の方略」から「言語的方略」へと移行するという「文処理方略の移行仮説」を提案し、その方略移行のプロセスを明らかにしたものである。

導入では、本研究の背景に言及しながら、成人を対象に行われたこれまでの空主語文処理研究の問題点を指摘し、なぜ第一言語習得者と第二言語習得者を対象に空主語文処理の実験をするのかということ論じている。

第1章では、理論的な面から空主語文について概観したうえで、成人を対象に行った英語・日本語・中国語の空主語文処理実験を紹介し、知覚の方略と「透明性の仮説」について論じている。

第2章では、中国の小学生を対象にした実験結果が報告されている。主文動詞をまだ習得していない段階の低学年児は、距離の情報に基づく知覚の方略を用いるが、中学年児では、知覚の方略と言語的方略の両方をランダムに用いるようになり、高学年児になって主文動詞を習得している段階になると、主文動詞の手がかりを利用して文処理を行う段階に移行することが示された。

第3章では、日本の小学生を対象にした実験結果が報告されている。格助詞を持つ日本語においては、主文動詞を習得していない段階でも、格助詞の情報（言語的知識）を用いて文処理が行われている可能性が考えられる。しかし、主文動詞をまだ習得していない段階にある低学年児は位置・距離のような知覚の方略を用いており、格助詞という言語的知識の利用は見られなかった。一方、主文動詞を習得している高学年児になると、言語的知識を利用して文処理を行う段階に移行することが示された。

第4章では、英語を母語とする中国語学習者を対象にした実験結果が報告されている。初級学習者は位置・距離などの知覚の方略を用いて空主語文処理を行い、中級学習者は知覚の方略だけではなく、動詞 *shuo* を利用するという言語的方略も用いるようになり、習得度が高い上級学習者は即時的に動詞の語彙情報を利用する言語的方略に移行することが示された。

第5章では、英語を母語とする日本語学習者を対象にした実験結果によって、次のことが明らかとなった。初級学習者は母語の干渉による擬似的な文法的手がかりと、距離のような知覚の方略の両方を用いて文処理を行い、中級学習者は母語には存在しないターゲット言語の文法的手がかりを用いるようになり、上級レベルになると、母語話者と同様の「主語優位」という言語的方略を利用するようになる。

第6章では、前章までの実験結果や議論を踏まえ、言語知識の発達に伴う処理方略の移行を論ずるとともに、本論文の言語処理研究における意義が示されている。

本論文は、異なる言語において、第一言語習得者と第二言語習得者に着目し、言語知識の発達につれて処理の方略が移行することを、心理言語学的な実験を通して、実証的に明らかにした。この成果は、言語処理と言語理論との関わり、さらに第一言語習得研究、第二言語習得研究に対する重要な意義を有する。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。